

ロシアの子供の怪談（ストラシルキ）

越野剛

現代の怪談や都市伝説の研究は欧米や日本ではフォークロアの一分野として既に定着した観があるが、ロシアではまだまだ面白いことが手を付けられずに残っているようだ。怪談を中心とする子供のフォークロア研究がロシアでちょっとしたブームになっている。1998年に出た『ロシアの学校のフォークロア』¹はその集大成とも言えるものであり、怪談、残酷なポエム、妖怪（スペードの女王）の呼び出し術、替え歌、落書き等々、子供のフォークロアを諸ジャンルごとに論文とテキストを付してまとめている。この本に集められたテキストをもとにして、本論ではロシアの子供の怪談について紹介したい²。

オソリナという早くから子供のフォークロアに注目していた研究者は、数え唄（シタルキ считалки）、からかい文句（ドゥラズニルキ дразнилки）等の子供のフォークロアのジャンル名から類推して、子供の怪談に「ストラシルキ страшилки」という名称を与えた³。ところがまぎらわしいことに、えげつない内容を4行または2行の詩の形式にした「残酷なポエム садистские стишки」という別のジャンルに属する子供のフォークロアがあり、これもしばしばストラシルキと呼ばれている。以下はその一例である。

Маленький мальчик нашел ананас, 小さな男の子がパイナップルを見つけたが、
Но не подумал, что это фугас. それが地雷だとは思わなかった。
Ножик достал, чтобы почистить и съесть. 皮をむいて食べちゃおうとナイフを出した。
Жопу нашли километров за шесть.⁴(C.560.) 6キロ離れたところで尻が見つかった。
ヴァーシャ・ミハイロフ(11才) レニングラード 1981年

文学作品の中で子供の怪談を取り上げたのはツルゲーネフが最初ではないだろうか。『獵人日記』の中の一編『ページンの荒野』では、夜になって牧童たちが焚き火の周囲に集まり、ルサルカや森の精、幽霊などが引き起こす様々な不思議な出来事が次々に語られる。農村の写実的な描写が多い『獵人日記』の中でも、ひとむかし前のロマン派の枠小説にも通じる、不思議で幻想的な味わいを持った作品である。とりわけ次に挙げる怪談は後を引くような不気味さを持っている。

¹ Русский школьный фольклор /Сост. А.Ф. Белоусов, М.:Ладмир, 1998.

² 子供のフォークロアに関しては以下のような邦訳がある。渡辺節子「ストラシルカ(1)」、『なるうど』, 30号, 1995, 41-47頁; 石井久美子「スペードの女王の呼び出し方」、島田揚介「子供の怪談とそのパロディ」、『現代ロシア文学作品集』9号, 札幌, 2000, 108-123頁; 越野剛「残酷なポエム」、『現代ロシア文学作品集』10号, 札幌, 2001, 3-5頁。

³ Гречина О.Н., Осорина М.В. Современная фольклорная проза детей // Русский фольклор. Вып.20. Л., 1981. С.96.

⁴ Русский школьный фольклор. С.560. 以降、同書からの引用は()内にページ数を記す。

こんなことがあったのさ。フェージャ、おまえは知らないか、あそこには水死人が埋められてるんだ。溺れ死んだのはずいぶん前で、池がまだ深かった頃だ。墓だけはまだ見えるぜ、かろうじてだけどな。(…)夜だ、明るい夜だった。月が出てた。エルミールは堤防を通った。その道はあそこに出るんだ。そうやって、猟犬番のエルミールは馬を走らせたんだが、見ると、水死人の墓の上に子ヤギがいるじゃないか。真っ白の巻き毛の可愛いやつが、うろうろしてる。エルミールは思ったね。「ようし、このまま消えちまったことにして、あいつを捕まえてやろう」そして馬を降りると、そいつを手につかんだ。けれど子ヤギは平気なんだ。そいでエルミールが馬のそこへ行くと、馬のやつ、目を見開いて、鼻息を荒げ、首を振るんだ。けどもエルミールは馬を静めると、子ヤギを連れて乗り、また馬を出した。子ヤギは自分の前に抱えてだ。子ヤギの方を見ると、子ヤギも彼の目をまっすぐに見るじゃないか。猟犬番のエルミールは気味が悪くなった。こんな子ヤギが誰かの目を見つめるなんて話は聞いたこともない。しかし、まあいいさ。彼は子ヤギの毛をなではじめて、言った「よしよし、良い子だ」するとヤギが不意に歯をむき出して言うんだ「よしよし、良い子だ…」⁵

現代のロシアで子どもたちが語る怪談は、農村の伝統的なフォークロアを背景にしたツルゲーネフのものとは毛色がかなり異なる。町中のありふれたアパートが舞台になることが多く、ごく普通の日用品が魔法の力を帯び、伝統的な妖怪はめったに登場しない。典型的なストラシルキの例を以下に挙げる。

女の子が住んでいました。ママもです。ママは娘にレコードを買って言いました。「このレコードをかけてはいけません」そして仕事に出かけました。女の子は言いつけを破って、レコードをかけます。歌がきこえました。「娘さん！レコードを止めなさい！黒い手がおまえの町を探してるぞ！」女の子は耳を貸さず、レコードを止めません。「おい、娘さん！黒い手がおまえの町を見つけて、おまえの地区を探してるぞ」女の子は耳を貸さず、レコードを止めません。「おい、娘さん！レコードを止めなさい！黒い手がおまえの通りを探してるぞ」女の子は耳を貸さず、レコードを止めません。また声がします。「おい、娘さん！レコードを止めなさい。黒い手がおまえのマンションを見つけて、おまえの家を探してるぞ！」女の子は耳を貸さず、レコードを止めません。「おい、娘さん！黒い手がおまえの家を見つけて、呼び鈴を探してるぞ！」女の子は呼び鈴の音を聞きましたが、レコードを信じません。かけよって、ドアを開けます。黒い手が彼女をつかまえて、絞め殺しました。レコードから声がします。「チリーボン！チリーボン！黒い手が女の子を殺したよ！」(C.70-71)

ターニャ・スプルン (11 才) ペテルブルク郊外の子供キャンプ 1993 年

ここで出てくる「黒い手 Черная Рука」は、子供の怪談に頻繁に登場する怪物であり、手だけで空を飛び回ったり、車を運転したり、あるいは黒いピアノや、壁の黒いシミから抜

⁵ Тургенев И.С. Полное собрание сочинения в 12 томах. М., 1978-86. Т.3 С.96.

け出したりして、子供のところへ現れ、首を絞めて殺そうとする。ここでは母親の言いつけを守らなかった子供のところへ、黒い手がだんだんと接近して恐怖をあおっている。町、通り、マンション、家（クバルチーラ）という順序を守った怪物の接近は、このタイプの怪談に典型的なプロットの構造である。黒い手の他にも「黒い手袋 Черная перчатка」「走る棺桶 Гроб на колесиках」「ガラスの人形 Стеклянная кукла」「緑の目 Зеленные глаза」なども同じような手順を踏んで子供を襲い、レコードの代わりにラジオやテレビ、電話などが危険を警告することもある。

現代の怪談では、新しく店で買ってきた品物が、例外なく家に不幸をもたらす。以下に挙げる例では、赤いカーテンが夜中に家族を一人ずつ呼びだしては墓場に連れ去ってしまう。カーテン自体が子供に襲いかかって、絞め殺したり、窓の外に投げ投げたりするバリエーションもある。共通しているのは、夜中に声がして、「起きなさい」「顔を洗いなさい」「着替えなさい」「窓わくの上に立ちなさい」といった命令が繰り返され、家族のひとりひとりを窓のそばへ引き寄せさせる点である。多くの例では、最後に残った子供が、命令をひとつ遅れで実行することによって危険を逃れる仕組みになっている。

あるとき娘が家のカーテンを破いてしまいました。そこでママと二人で新しいのを買いに出かけました。おばあさんが出かける前に赤いのは買わないように注意しましたが、二人は聞かずに赤いのを買いました。家に帰るとテーブルの上に置いて、寝てしまいました。夜になると声がします。「パパ、パパ、起きなさい」パパは起きます。「パパ、パパ、顔を洗いなさい」パパは顔を洗います。「パパ、パパ、着替えなさい」パパは着替えます。「パパ、パパ、窓わくの上に立ちなさい」パパは窓わくの上に立ちます。棺桶が飛んできて、パパを捕まえて、墓場へ連れて行ってしまいました。次の日に同じことがママにも起こりました。その次の日また声がしました。「娘よ、起きなさい」娘は眠っています。「娘よ、顔を洗いなさい」娘は起きます。「娘よ、着替えなさい」娘は顔を洗います。「娘よ、窓わくに立ちなさい」娘は着替えます。棺桶が飛んできて、カーテンを捕まえて、墓場へ飛んで行きました。そこには胸まで赤く、頭と首の黒い魔女がいます。棺桶が墓場に飛んでくると、老女は言いました。「さあ、棺桶よ、娘をよこしな」棺桶のふたを開けると、そこには赤いカーテンが入っていました。怒った老女は憎しみのあまりカーテンを食ってしまいました。ママとパパは家に戻りました。こうして娘は自分ではそうと知らずに、家族を滅亡から救い、自分も助かったのです。(c.84)

カーチャ・ブレホフスカヤ (8才) レニングラード 1981年

夜になるたびに隣の家族が一人ずつ消えていくという出来事は、スターリンの大テロルの時期には多くの人が目撃しているはずであり、その子供なりの理解が都市伝説として残ったと考える人もいる⁶。そうした説にはもちろん客観的な根拠はないが、そうした「恐ろしい起源」の説明そのものがフォークロアの一部となって怪談の生命力を強めることはあ

⁶ Успенский Э., Усачев А. Жуткий детский фольклор // Успенский Э.Н. Общее собрание героев повестей, рассказов, стихотворений и пьес в 10 томах. Т.10. С.-П., 1993. С.124.

りうるだろう。

カーテンの他にも、手袋やレコード、靴、ピアノなどの日用品が現代の怪談では危険な性格を持つ。こうした品物は、例えば「黒い色のピアノだけは買ってはいけない」というような命令が破られることによって、家の中に持ち込まれる。このような禁止とその違反というモチーフは、昔話などにも見られるものであり、子どもたちの怪談を伝統的なフォークロアと結びつける要素のひとつになっている。また、妖怪や不吉な品物が家に侵入するというモチーフから明らかのように、ロシアの子供の怪談は、日本とは違い「学校」ではなく「家(クバルチーラ)」が舞台になることが多い。家で留守番中の子供を怪物が襲うというモチーフが多く見受けられるが、共働きが早くに定着したソ連社会の家庭風景が階段に影響していると思われる。

現代の怪談に特徴的なもうひとつの要素は、「黒い手」「赤いカーテン」などの名称から分かるように、色のイメージを多用する点である。研究者の統計によると、よく現れるのは「黒」「赤」「白」の三色であり、「緑」「青」「金」がそれに続く⁷。これらはいがい不吉なイメージを呼び起こし、「買ってはいけないもの」や妖怪たちの目印になっている。色による連想を通じて、例えば「緑のレコード」から「緑の目」が現れたり(C.80-82)、「黒い手」の出入りする「黒いシミ」が「黒い扉」になって、盗賊のいる地下室に通じたりもする(C.77-78)。赤い色は炎や血の色でもあり、「赤い靴」をはいた女の子が足の血を吸われたり(C.94-95)、「赤い手袋」が「赤い顔の女」を呼び寄せ、家が火事になるという話も見受けられる(C.75-76)。

白い色は、黒の反対として、まれに安全な良い色として使われる場合もある。黒い手袋が災いを招く一方で、白い手袋は幸せを招くという話も存在する。白と黒という色の対立がはっきりと見られる例を挙げよう。

白い白い世界の白い白い家に白い白い男が住んでいた。彼は白い白い靴と白い白い手袋と白い白いコートを持っていた。そしてある時、白い白い靴と白い白い手袋と白い白いコートを身につけて、自分の白い白い町を歩いてみることにした。どんどん、どんどん行くと、黒い黒い家と黒い黒い階段があった。黒い黒い階段を上ると黒い黒いドアがあった。そこで黒い黒いドアを試してみると、カギはかかっていなかった。黒い黒い部屋に入り、黒い黒い隅に行くと、黒い黒い男がいた。男は振り返ると言った。「俺の心臓を返せ！」(聞き手を恐がらせるために、最後の言葉は大声で叫ぶこと)(c.67)

ルスラン・スイソエフ (11 才) ミアス市 (チェリャビンスク州) 1989 年

「黒い黒い черный-черный」や「白い白い белый-белый」の過剰なほどの繰り返しのモチーフを持つこうしたタイプの話は、怪談の中でも特異なグループを形成している。同様のプロットの中で「黒い手」と「白い手」が対立する場合もある。言葉だけでなく動作も怪談の重要な構成要素であり、この例のように語り手はクライマックスで声を大きくしたり、聞き手の体をつかむことをしばしば要求される。オソリナとグレチナはこのように語り手

⁷ Лойтер С.М. Детские страшные истории //Русский школьный фольклор. С.63.; Гречина О.Н., Осорина М.В. Современная фольклорная проза детей. С.99.

の特殊なしぐさを伴う怪談を「演技を含む怪談 страшилка-игра」と名づけている⁸。最後の「俺の心臓を返せ」という言葉は、この話のコンテクストだけでは不可解だが、次に挙げるタイプの怪談が背景にあるように思われる。

むかしある女が娘と住んでいた。あるとき二人はふたつのルビーを見つけた。娘が言った。「ひとつはあたしの、ひとつはママのものにしましょう」(ぞっとするような声でしゃべらなくてはいけない)ママも賛成した。「ただし私が死んだときは、指にルビーをはめてね」娘はその通りにした。それから娘はひどい酒飲みの男と結婚した。あるとき男は家に帰って言った。「俺は金を全部、おまえのルビーの分も飲んじゃった。おまえの母のところに行って、墓を掘ってルビーを取ってこよう」それで、彼女も同意した。二人は夜遅くに墓地へ行った。墓に着くと、掘り返した。ところが、ルビーがはずせない。そこで手首を切ることにした。墓地を歩いて家へ向かう。誰かが追いかけてくるような気がする。振り返ると、誰もいない。家に逃げ込んで、窓とドアをぜんぶ閉じた。不意にドアのベルが鳴る。ドアが開くと、そこにいたのは母だった。「ごきげんよう、おまえ」「ごきげんよう、母さん」「指はどうした、指は！」(不意打ちで人の手をつかみ、最後の言葉は叫び声で言う)(c.69)

ユリヤ・ロマノヴァ (9才) サンクトペテルブルク郊外の子供キャンプ 1993年

死者の墓をあばいて、身につけている貴重品を奪い取ると、あとで死者がそれを取り返しに現れるという話にはいろいろなバリエーションがある。「金の足」というこれもよく知られた怪談では、黄金の義足をした男の墓が暴かれ、足が切り取られてしまうが、やがて盗んだ連中の元に死者が復讐に現れる(C.110-111)。いずれにせよ、話の最後で語り手は「わたしの指を返せ」とか「俺の足を返せ」といった台詞を効果的に叫び、相手の手や体の一部をつかまなくてはならない。この印象的な部分だけが他のタイプの怪談にも引用されて、先に挙げたような話が出来たと考えられる。

母親による子供殺しというのも、怪談によく見られるモチーフのひとつである。その典型的なものを以下に挙げる。

母と娘が住んでいました。母は娘に白い手袋を買って言いました。「私が死んだときは白い手袋を身につけてはいけませんよ」母は死にましたが、娘は手袋を身につけました。ラジオから声が聞こえます。「娘さん、娘さん、白い手袋を脱ぎなさい。母親が墓場を歩いているぞ」娘は脱ぎません。「娘さん、娘さん、白い手袋を脱ぎなさい。母親が通りを歩いているぞ」彼女は脱ぎません。「娘さん、娘さん、白い手袋を脱ぎなさい」母親が部屋にはいってきました。やっと娘は脱ぎました。母親は娘を絞め殺しました。(c.76)

Г. Мие-Ина(12才) クルガナヴォロク村 (カレリア) 1973年

このタイプの話では母親が死ぬときに遺言を残すが、それが守られなかったために死んだ母が子供を殺しにやって来る。ラジオによって繰り返される警告というモチーフは、最

⁸ Гречина О.Н., Осорина М.В. Современная фольклорная проза детей. С.101.

初に挙げたレコードと黒い手の話とも共通する。遺言の内容はせっかく買ってあげた手袋や靴を身に付けるなというような理不尽なものであることも多いのだが、死後 40 日間は身につけるなというように宗教儀礼と結びつくような場合もある(c.93-94)。おそらくは後者の方が起源的に古いのであろう。

生きている母親も死んだ母親と同じくらい危険な存在である。次の例は「赤いクッキー」という名でよく知られている怪談だが、ここで母親が焼いてくれるクッキーの材料は人肉である。それを知った子供は殺されるか、この例のように口がきけなくなってしまう。

ママがクッキーを焼いてくれて、娘はそれが気に入った。そこでママにもっと焼いてくれるよう頼んでみた。ママは約束してくれた。夜になった。娘が目を覚ますとママが隣にいない。耳をすますと、玄関のドアの音がする。娘は起きあがって服を着ると、こんな遅くにママがどこへ行くのか後を付けてみることにした。どんどん行くと不意にママが墓地へと曲がって行く。娘は追いかけて、墓の後ろに立って、ママが何をするのか見ていた。ママは墓を掘り返し、死体の脚を切り取ると、紙に包んで家に向かった。娘も後を追った。夜が明けた。朝になってママが朝食用に赤いクッキーをすすめた。娘は断った。そこでママは全てを悟った。娘はおびえたが、母親は消えてしまった。それ以来、娘は口がきけなくなった。(c.91)

ナターシャ・ホリコヴァ(10 才) ジェレズノドロジュヌイ(モスクワ州) 1989 年

一般に怪談では女性が果たす役割の方が大きいように思える。遺言やクッキーの話で子供を襲うのは必ず母親であり、主人公の子供も娘であることが多い。魔女や後述する「スペードの女王」といった女の怪物の活躍も目立つ。怪談の世界における女性優位の原因はうまく説明できないが、怪談の語り手も女の子であることが多い。『ロシアの学校のフォーククロア』に上げられた 150 の怪談の語り手の性別を調べると、姓名などから判断して女性が 103 話、男性 26 話、不明が 21 話である。

非常にまれだが親による子供殺しに父親が参加することもある。次の例では母親は足がひづめになっており、父親は口に牙が生えており、明らかに悪魔のイメージが使われている。この秘密を知ってしまった子供は残酷な殺され方をする。

むかしあるところに女の子とパパ、ママ、おばあさんが住んでいた。ママはいつも長いスカートをはいていたし、パパは決して笑うことがなかった。娘はおばあさんに尋ねた。「おばあさん、どうしてママは長いスカートをはいてるの?」「食卓についたとき、スカートを持ち上げてみればわかるさ」「おばあさん、どうしてパパはぜんぜん笑わないの?」「パパが新聞を読んでいるときに、かかとをくすぐってみればわかるさ」女の子はその通りやってみた。テーブルの下にもぐって、ママのスカートを持ち上げると、赤いひづめが見えた。かかとをくすぐると、パパは笑いだし、赤い牙が見えた。夜に女の子が通りを見ると、母親がひづめでおばあさんを踏みにじり、父親はおばあさんを食べている。朝になって母親が尋ねた。「おまえ私たちのしたことを見たね?」娘は答えた。「ええ」そこで夜になってから、両親はおばあさんにしたのと同じことを娘にもした。(c.96)

レニングラードの生徒たち、1987-89

カニバリズムもまた子供たちの好むテーマのようだ。次に挙げる例では人肉でカツレツをつくる老婆が登場する。最後に食べ物からでてくる指によって消えた子供の消息が分かるのは、このタイプの怪談に共通する結末のモチーフである。両親が肉の缶詰を買って食べている最中に、自分の子供の指に気がつくというパターンもある。(C.87)

むかし母と父が暮らしていて、二人には娘がいました。あるとき母は娘をカツレツを買いに店へやりました。娘が店に着くと、カツレツは売り切れでした。近くを老婆が通って、話しかけてきました。「娘さん、あんたはカツレツがいるのかい?」「ええ」娘が答えます。すると婆さんは娘を家に招きました。二人が家に着くと、婆さんは娘にソファに座るよう言いました。すると娘は不意にくるくる回りはじめ、消えてしまいました。いつまでも娘が帰ってこないで、ママは彼女を探しに出かけました。同じ婆さんの所にやって来て、聞きます。「おまえさん、私の娘を見なかったかい?」「彼女の所へ案内してやろう」婆さんは言いました。そしてとりあえず座って、ソファで待つよう言いました。ソファに座ると、とたんにくるくと回りはじめ、母も消えてしまいました。父も妻と娘を探しに出かけますが、ながいこと見つけることができません。警察を呼んで、一緒にこの婆さんの所へ行くと、彼女はカツレツを焼いています。カツレツを裂いてみると、そのひとつから娘の爪(青色の)が見つかりました。この婆さんは殺されました。(c.86)

II. ロバノヴァ (8才) ヤルグバ村 (カレリア) 1979年

ソファに座ると下に落ちて肉挽き器によってミンチにされてしまうというモチーフは、怪談によく現れる。ロトマンは19世紀の帝政ロシアの秘密警察には、座ると床下に落下してそこでムチ打たれるというソファのうわさ話が広がっていたことを記しているが⁹、何か人間(ロシア人?)の心性に訴えるような普遍的な恐怖の型があるのかもしれない。

怪談とは別に子供のフォークロアには、スペードの女王の「呼び出し *вызывание*」という興味深いジャンルがある。呼び出しには決められた手順があり、夜中にトランプのカードと鏡、ろうそく等を用意し、明かりを消して呪文を唱えると、鏡の中からスペードの女王がやってくるとされる。その際に間違った対応をすると、女王に殺される可能性もある。その例を二つ挙げよう。

呼び出しは12時に暗い部屋です。毛布をかぶってもいいわ。窓に黒っぽい毛布や布をかけるとか。スペードの女王のカードと丸い鏡を用意して(小さいのがいいわ、カードが見えて、鏡におさまるくらいの)。左手で鏡を持って、カードは右手で鏡の端に沿って動かすの〔カードの裏を上に向けて〕。そして「スペードの女王、現れよ」って、彼女が現れるまで言うのよ。現れるときは、鏡に映るの、鏡の端から真ん中へ出てくるわ。鏡の中にね。

鏡が光ったら、女王が現れるの。もうカードをよけてもいいわ。

⁹ Лотман Ю.М. Избранные статьи. Т.2 Талинн: Александра, 1992. С.18-19.

彼女はとてもきれいだわ。緑の目、黒い編み髪、カードみたいに、もっときれいな。お下げのうしろ側はほどいてあるの。暗い色の服を着て、襟ぐりは〔浅くて〕、袖はふくらんでるわ。長くて、キラキラの飾りつき。白いネックレスも。

彼女が出てきたら、美しいと言ってはだめ。そうしたら顔を叩かれて、黄色いあざが残るわ。絞め殺されるかも。

彼女が現れたら、醜いと言うの、そして汚い言葉(мат)を使うの「блядь, сука, хуй」とかね。それから質問を三つするのね。例えば、「いつ私はお嫁に行くの」とか、「子供は何人できるの」「私の夫はどんなひと」「私は何才まで生きるの」「ママは何才まで生きるの」。

質問して、彼女が答えたら(声は普通だわ)夜なら明かりをつけないと、毛布をかぶってるなら、毛布をどけないとだめ。そうしたら彼女は消えるわ。光が怖いよ。彼女がよい言葉を聞かないようにしないといけないわ。

大きい祭りにするの。クリスマスとか、新年とか、パスハとか。(c.37-38)

レーナ・クプレヤニク (14 才) プリスノ村 (白ロシア、ゴメリ州) 1982 年

夜中の 12 時に、鏡の前に座るか立つかしないといけない。12 時になったら、スペードの女王をちぎって、鏡を見るんだ。遠くのほうにスペードの女王が現れて、近づいてくるはず。鏡の中に見えるんだ。首を絞めようとするぞ。絞め殺されないためには、明かりをつけるか、鏡を割らないとだめだ。明かりをつけないと、絞め殺される。(c.37)

ジーマ・エフィモフ (14 才) レニングラード 1982 年

最初にあげた例はベラルーシの農村のものだが、結婚相手を占ったり、マート言葉で相手をしたりなど、伝統的なクリスマス週間の占いの要素が多く入り込んでいる。二番目の例はレニングラードの子供が語ったもので、ここでは呼び出しが占いではなく、純粹に恐怖を体験して好奇心を満たすものとして考えられている。呼び出しは基本的には都市で生まれたフォークロアのひとつであるとされているが、農村から都市への人口移動、夏休みの子供たちの里帰りやキャンプなどを通じて農村の古い風習も混ざり合っている。このスペードの女王が怪談の世界にジャンルを越えて引用されることがある。

あるとき女の子が弟といっしょにスペードの女王を呼び出すことにしました。男の子は危なくなったら明かりを付けられるようスイッチの近くに座ります。女の子は鏡の前に座って呪文を唱えだしました。とつぜん窓ガラスが割れて部屋に風が流れ込みました。女の子は明かりを早くつけるよう叫びます。けれど男の子が明かりをつけないので、スイッチのほうに行って、明かりをつけました。辺りを見まわすと、床に死んだ弟が転がっていて、首には黒い指の跡があります。スペードの女王が彼を絞め殺したのです。(c.104)

ソルタヴァラ市 (カレリア) 1993 年

この話はまだ呼び出しのモチーフを保っているが、そこから全く離れて、例えば新しく買った赤いピアノにスペードの女王が隠れていて、夜になると家族に襲いかかるというヴァリエーションもある(C.103-104)。そのような場合、魔女、黒い手、走る棺桶といった怪談

でお馴染みのキャラクターの役割を、スペードの女王がそのまま引き継いだと考えられる。

子供はいつもストレートに怪談を語るとは限らない。怖いと見せかけて最後に笑わせるオチを用意するタイプの話が研究者は怪談のパロディーと呼んでいる。

むかしあるところに爺さんと婆さんがいました。二人はラジオを持っていました。買ったのはつい最近のことでした。あるときラジオが放送を始めます。「爺さん、婆さん、窓とドアをみんな閉めなさい。走る棺桶が通りに来てるぞ」爺さんと婆さんは窓とドアを閉めませんでした。ラジオからまた声がします。「爺さん、婆さん、窓とドアを閉めなさい。走る棺桶がアパートに入ったぞ」爺さんと婆さんはやはり窓とドアを閉めようとはしません。ラジオが言います。「爺さん、婆さん、窓とドアを閉めなさい。走る棺桶が踊り場まで上がってきたぞ」爺さんと婆さんは、もはやドアと窓を閉めに近づくのが怖くなりました。ラジオの声がまた言います。「爺さん、婆さん、窓とドアを閉めなさい。走る棺桶がドアを入れてきたぞ」そこで爺さんは我慢できなくなり、窓に飛び上がりましたが、婆さんは取り残されて、どこへ隠れたらいいのか分かりません。そのときラジオがまた言いました。「ただいまロシアの昔話をお伝えしております」(c.114)

M. ペトロヴァ(9才) ペトロザヴォーツク 1983年

家への怪物の接近とラジオによる警告という広く見られるタイプの話だが、結末にどんでん返しを用意されている。怪談のパターン化したプロットやモチーフを逆手に取ることによって、聞き手を怖がらせるのではなく、笑わせることができる。ドアを開けると怪物ではなく、チェブラーシカとワニのゲーナといったアニメの人気キャラクターが唐突に登場するバリエーションもある。「黒い黒い家の黒い黒い部屋には」というタイプの話を作り替えると、「黒い黒い箱の中から、ピンクのピンクの子豚が走り出した」り、「心臓を返せ」ではなく「俺のスリッパを返せ」という声がかたりする(C.114-116)。パロディーはとりわけ典型的で誰でも知っている話に対して作られるので、逆に何が典型的な話なのかを把握するのに役立つ。

**

次に子供の怪談が現代文学に与えている影響を5人の作家を通じて見てみよう。ヴィクトル・ペレーヴィンの『青い火影』は、現代版『ページの荒野』と名付けるのがふさわしい。この作品はツルゲーネフの短編と同様に枠小説の形式を用いており、キャンプに集まった子供たちが、夜になって順ぐりに怪談を披露する。それぞれの話は『赤いシミ』とか『緑の椅子』『黒いウサギ』などの題名を持っている。『青い火影』という小説自体のタイトルもそうだが、色彩の形容詞はストラシルキを示す記号であり、明らかに作者によって意識的に用いられている。死者の世界というテーマが作品全体を貫いているが、これも怪談を通じて子供たちが抱いている死への興味と無関係ではない。ただしここにてでくる怪談は子供のものとしては、うまくできすぎている。子供の怪談の形式を借りつつ、内容は小説家の創作というところがこの小説のおもしろいところだろう。「黒いウサギ」の話を

例として挙げておく。擬似東洋哲学的なパラドックス（「人が蝶の夢を見たのか、蝶が人の夢を見たのか」）は、ペレーヴィンがしばしば好んで使うモチーフである。

あるピオネールキャンプでのことだった。その本館の壁には、ありとあらゆる動物の絵が描いてあった。そのひとつが太鼓を持った黒いウサギさ。その足にはどういうわけか2本の釘が打ってあった。あるとき近くを女の子が通った。昼食から休み時間に行くところだった。彼女はこのウサギが可哀想になったんだ。近づいて、釘を抜いてやった。すると不意に黒いウサギがこっちを見ているような気がした。生きてみたいにさ。けれど気のせいだと思うことにして、別館の方へ行ってしまった。休み時間になった。このキャンプにいた人間はみんな眠ってしまった。そして夢の中で、休み時間が終わり、目が覚めて、おやつを食べに行った。その後もまるでいつもと同じように事は運んだ。卓球をしたり、本を読んだり、いろいろさ。けれどこれはみんな夢の中だったんだ。やがて期間が過ぎて、それぞれの家に帰って行った。それからみんな大人になって、結婚して、働くようになり、子供を育てた。だけど本当はピオネールキャンプの別館の中で眠ってるだけなのさ。黒いウサギがずっと太鼓を叩いてたんだ。¹⁰

有名な児童文学作家のエドゥアルド・ウスペンスキーはラジオを通じて子供たちに怪談を手紙に書いて送るよう呼びかけた。彼の『赤い手、黒いシャツ、緑の指』という愉快な小説は、この時に集まった子供たちの手紙に基づいている。ピオネールキャンプで子供の絞殺死体が見つかった。取締官実習生のラフマニンが捜査に乗り出すが、どうやら犯人は赤い手や黒いシャツなど、子供の怪談に出てくる化け物どもらしい。捜査の過程でラフマニンは火事を招く赤い顔の女や、不吉な黒い路面電車、空を飛ぶ手などと実際に対決することになる。小説はラフマニンが事件の手がかりを探し回る過程と、あちこちに挿入されている子供の怪談から成り立っている。

推理小説である以上、最後には事件が解決されなければならない。ラフマニンは「確かにこの世には説明できない不思議な物事が存在しているが、人間が害を受けるのは、それを恐がるからである。中世の拷問において、最初に真っ赤に焼けた鉄棒を見せられると、何でもない冷えた棒を押しあてられた場合でも、皮膚に火傷ができることがあったではないか」¹¹という結論を出す。怪物が人間を恐がらせるのではなく、人間の恐怖が怪物を生み出すという、ある種のまっとうで啓蒙的なニュアンスが事件の解決に感じられる。

ペレーヴィンとは違い、ここで引用される怪談は子供たちのオリジナルに近いように思われる。『赤い手、黒いシャツ、緑の指』の他にも、ウスペンスキーは『子供のこわいフォークロア』という題で、自分が収集した怪談をまとめている¹²。これも興味深い資料ではあ

¹⁰ Пелевин В. Синий фанарь // Пелевин В. Сочинения в 2 томах. М.:Терра, 1996. Т.2. С.311.

¹¹ Успенский Э.Н. Красная рука, черная простыня, зеленые пальцы // Успенский Э.Н. Общее собрание героев повестей, рассказов, стихотворений и пьес в 10 томах. Т.10. С.-П., 1993. С.81.

¹² Успенский Э., Усачев А. Жуткий детский фольклор // Успенский Э.Н. Общее собрание героев. Т.10. С.83-197.

るが、出典が示されていないなど、学術資料として使うには多少の問題がある。

異色の人気絵本作家グリゴリー・オステルもストラシルキに興味を抱き、『恐怖の学校』で怪談のジャンルに挑戦している¹³。裏表紙に書かれた歌い文句には「それではご覧あれ、どちらが上手にストラシルキを創作できるのか、子供たちか、それとも作家のオステルか」とある。絵本に収められた24の怪談はすべて学校を舞台にしており、様々なディテールはロシアの子供の学校生活を知る上でも興味深い(ただし先にも触れたように本物のストラシルキには学校がめったに登場しない)。いくつかの話には古典的なプロットの再利用が見受けられる。音楽教師が3日間学校で夜を過ごす『魔法をかけられた備品』などは例えばゴゴリの『ヴィイ』と全く同じタイプの話であり、舞台を現代の学校に移し変えたものである。子供のストラシルキの影響が明らかな話はむしろ数少ない。女の子の血を吸う「雑巾」(『満腹しない雑巾』)、宿題を手伝ってくれる「指」(『毛むくじらの指』)といった怪物の形象、そして決して開いてはいけないという『黒い表紙の教科書』のモチーフが目につくぐらいである。子供のストラシルキに特徴的な「親による子殺し」などのショッキングなモチーフは、さすがに児童作家であるオステルは避けている。むしろ『恐怖の学校』で面白いのは、「九九の表 таблица умножения」ならぬ「苦苦の表 таблица удушения」を暗記させられる話や、理科の実験中に「血の凍るような」怪談を聞いて本当に血が凍ってしまう女の子の話などに見られるどこかユーモラスな言葉遊びであろう(『苦苦の表』、『凍りつく血』)。「この怪談を完成させなさい」という副題のついた三つの怪談は子供たちが自分で書き続けるように最後が白紙になっている。例を挙げると、遠足でバスに乗り込んだ子供たちがいる。ところが入ったトンネルがいつまでも終わらない。気がつくと運転席には誰も座っていない。そのとき窓の外に見えたものは...? <以下空白>(『真っ暗な遠足』)。学校のテストのパロディのようでもあり、怪談を書く腕比べを子供たちに挑んでいるようでもある。職業作家としての技の多彩さではオステルの方が遥かに優れているが、それでも根源的な「怖さ」では子供のストラシルキの方が勝っているというのが筆者の判定である。

さまざまな色をした空を飛ぶ手は子供の怪談に出てくる最も有名な怪物のひとつだが、マカーニンの『プロレタリア地区のシュール』とニーナ・サドゥールの『青い手』にはそのイメージが用いられている。

『プロレタリア地区のシュール』の主人公コーリャは金具工として働き、同じ工場の食堂で働く恋人クラヴァと平凡な暮らしを送っている。あるときプラカードに描かれた労働者の巨大な手を見て以来、この手が実体化して襲ってくるようになる。この手は他の人のいる場所には現れず、家から工場への行き帰りに人気のない所でとつぜん空から降りてきたり、夜眠っているときに窓から指をつっこんだりする。

その夜、クラヴァは暑くて苦しがつた。たぶん、彼女が目を覚まして水を飲み、再び窓を開けたのだ。けれどコーリャが自分で窓を閉め忘れただけかもしれない。夜中にコーリャは圧迫されている気がした。クラヴァが寝返りをうって肩を押しつけてきたのか

¹³ Остер Г. Школа ужасов. 2001.オステルについては本書に収録の毛利公美氏の論文を参照。

と思ったがそうではなく、クラヴァは端っこで彼から離れて眠っていた（暑いので大の字になって）。そのときコーリャはふたつの巨大な指が彼を締めつけているのに気づいた。手は窓をくぐり抜けられなかったが、指を二本、突っ込むことはできて、その指で（どっちの指も動く短い丸太のようだった）コーリャを探して、寢床を手さぐりしている。¹⁴

コーリャの友人でインテリ気取りのヴァレラは水平的な人間は垂直方向からの打撃に襲われやすいと暗示的な台詞を語る。結末部でのコーリャとヴァレラの運命は対照的である。コーリャは巨大な手につかまり、ひねりつぶされてしまう。気ままな生活を送っていた、自称垂直的な人間のヴァレラは一人の女性に本気で惚れ込んでしまうことによって、平凡で水平的な生活に向かうことが予測される。この「手」は普通の安定した社会生活を営むものが持つ不安とか抑圧、経験したことの無い出来事に対する恐怖などをイメージさせる。

サドゥールの『青い手』はタイトルそのものが子供の怪談をほうふつさせる。主人公のマリヤ・イワノヴナは刑務所帰りで盗難癖のある俗悪な女だが、隣に引っ越してきた美人のヴァーリャに嫉妬して、なにかにつけては彼女をいじめめる。とうとうヴァーリャは病気にかかり、血の気が抜けて手が青くなる。ある夜、眠っているマリヤの所へ青い手が飛んできて、彼女を絞め殺す。いっぼうでヴァーリャはそっれきり姿を消してしまう。

穏やかな眠りの中ですべてが動きを止めていた。不意にマリヤ・イヴァノヴナが目覚めた。胸騒ぎを感じて、見ると、窓のカーテンが揺れている。「なんだろう」と彼女は思った。近づいてみると、カーテンのひだから青い手が伸びてきた。マリヤ・イヴァノヴナは飛びのこうとしたが、手が彼女のぽったりした喉をつかんだ。マリヤ・イヴァノヴナはしゃがれ声をあげ、指をふるわせて抜けだそうとしたが、手は締めつける力を強めたので、彼女の目には甲いの炎が漂いだした。¹⁵

これらふたつの作品はペレーヴィンやウスペンスキー、オステルとちがって、直接に子供の怪談をモチーフにしているわけではない。しかしマカーニンもサドゥールも、作品を構想する際に、子供の怪談に出てくる「空を飛び、人間を襲う手」を念頭に置いていたのは間違いない。『プロレタリア地区のシュール』では水平的人間の漠然とした不安、『青い手』では虐げられた大人の怨念が妖怪を出現させている。ウスペンスキーの『赤い手、黒いスーツ、緑の指』でも怪奇現象に合理的啓蒙的な説明が与えられていた。しかしストラシルキの怪物には子供を襲う特別な動機付けがある訳ではなく、むしろその無動機性、理由のない残酷さこそが、大人の読者（あるいは大人の作家）にとっては不気味に感じられるのではないだろうか。

他にペトラシェフスカヤの『東スラヴ人の歌』にストラシルキとの関連を指摘する意見もあるが¹⁶、「空を飛ぶ手」のような明確なモチーフの一致はないように思える。サドゥールの他の短編にも言えることだが、こうした「怪談風」の現代小説は、ストラシルキだけ

¹⁴ Маканин В. Сюр в пролетарском районе // Новый мир, №9, 1991. С.111.

¹⁵ Садур Н. Синяя рука // Ведимины слезки. М.:Глагол, 1994. С.223.

¹⁶ Трыкова О.Ю. Жанры детского фольклора Ярославской области // Живая старина. 1998. №2. С.23.

でなく、都市のフォークロアや「大人」の怪談にも対象を広げて比較して見る必要があるであろう。

大人のいない所でこっそりと語られる子供の怪談は、権力者の目の届かないところで回し読みされるサミズダート文学に似ている。子供殺しやカニバリズムといった不道德なモチーフを持つ子供のフォークロアを研究することは、ソ連時代には「安全ではなかった」という証言もある¹⁷。しかしどの国でも子供にとって大人の社会は、多かれ少なかれ「抑圧体制」であり「検閲者」なのである。従って「反社会的」な子供のフォークロアは、特に「全体主義的」な社会でなくとも普遍的に存在する。日本の「学校の怪談」も残酷なイメージに満ちあふれているし、筆者も少年時代に「お正月にはモチ食って 喉を詰まらせ死にましょー 早く来い来い霊柩車」といった不道德な替え歌を喜んで口ずさんだ記憶がある。文学作品には快樂を呼ぶ毒物という側面があると思うが、それを子供たちは怪談によって初めて体験するのである。

¹⁷ *Топорков А.Л. Пиковая дама в русском фольклоре // Русский школьный фольклор. С.15.* ;トポルコフの論文は越野による翻訳がある。「子供のフォークロアにおけるスベードの女王」、『現代ロシア文学作品集』9号、札幌、2000、96-107頁。